星降る夜の願い

mahu-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
星降る夜の願い

【Ｎコード】
Ｎ４４５１ＢＡ

【作者名】
ｍａｈｕ－

【あらすじ】
少年と少女は珍しい流星群を見に行くことになる。そこで二人はお星さまに願いごとをする。その後少年は親の転勤でその町を離れることになり、少女とまた会えた時お星さまの願い事を叶えることを約束する。でも小さい時のことなんで忘れてたり、忘れてなかったり。あるとき少年が高校１年生の春に何かが起きる？
といった感じでお送りします。

プロローグ（前書き）

この作品は作者でもどうなっていくか分からないものです。ですので投稿していくのは不定期の中でも不定期なものとなると思います。要は作者のやる気次第です。
ご了承ください。

プロローグ

寒さが身にしみる冬のこと。
ある少年がもうすぐ何十年に一度しか見られないという流星群を見に少女を誘った。
少年は流星群について熱く少女に語った。
宇宙や星に関して少年は強い興味を持っているようだ。
そんな少年の様子に驚きながらも。
少女は微笑んで、嬉しそうに頷いた。
その時の少年と少女はとても仲良くその日を心待ちにしていた。

そして流星群が降るという当日の夜。
少年はココアの入った水筒を持ち、少女は二人が座れるくらいの広さのシートを持って丘を登っていた。
丘には二人以外誰もおらず、多くの人が見る場所とは違い少年が一人で見に来ている特別な場所だ、と少女に語っていた。
二人は流星群が来る間、「まだかなー」「もうすぐくるよ。それにしてもきょうはさむいね」
と話しながら時間が流れて行った。

一瞬、一筋の光が空を流れた。

「あ、ながれぼしだ！」
「え？どこ？…あ、ほんとうね！どんどんおおくなってるわ！」

それはとても言葉では言い表せないくらいのたくさんの星がきれいな軌跡を描いて、
空に降り注いでいる。まるでシャワーのように途切れることなく星が流れていく。
星の大群が空を覆い尽くしてしまうくらい降り注いでいるのを見て、二人は言葉もなく眺め続けた。

星が、降る。

それを見た少女が「ねえ、●●くん」
「ん、どうしたの？」
「ながれぼしがきえるまでにねがいごとをいうと、そのねがいがかなうんだって」
「そうなんだ。でもたしか3かいもいわなきゃダメなんでしょ？」
「3かいを口でいわなくていいのよ。こころのなかでいうの」
「わかった。やってみる」

ふたりは願った。少年はほころんだ顔で、少女は真剣に。

このときの少年は知らなかった。
少女にはとても叶えたい願いがあったことを。
少女は知らなかった。
少年がとてもささやかな願いを抱き、それを叶えたい気持ちでいっぱいであったのを。

しかし、二人に降りかかったのは流れ星だけではなかったらしい。

少年の父親が転勤することになった。
3月初めということもあって転校した時新学期から入れるのも良いタイミングだから、ということらしいが、少年は今通っている学校を離れ、家族全員で引っ越すことに決まった。

引っ越す前日、学校で少年は父の転勤でほかの町へ引っ越すためクラスのみんなにお別れを言った。
クラスの男子とは仲が良く、別れがたかったこともあって、少年は我慢しながらも声が震えるのを抑えられなかった。先生もクラスのみんなも、
「ひっこしたさきのがっこうでともだちいっぱいつくれよ！」「ほかの学校にいけるなんてうらやましいぜ！」「」「」　……
と少年を励ましてくれた。

そしてその後、少年が真っ先に言わなければならない相手が。

少年が、引っ越すことがつらいと思ってしまう理由となる人が。

お別れが終わった下駄箱近くに。少女が少年が来るのを待っていた。

「あした、ひっこしちゃうの？」
「うん。とうさんがテンキンってやつがあるからだって」

「……」
少女は黙ったまま、とても悲しそうな表情をしている。今にも泣きだしてしまいそうなほど、うつむいたまま。それを見た少年は何とか少女に笑っていてほしくて、
「まえにみたりゅうせいぐんで、ぼく、おねがいごとしたよ」
「……なにをおねがいごと、したの？」
「うんとね、うんとね」
少年はモジモジしながらも、気恥ずかしくしていても、決意が決まったようで、大きな声で少女の目を見てはっきり言った。
「●●ちゃんといっしょにいたいって、おねがいごとしたの！！」

「えっ・・・」
少女は顔が茹でたタコの様に顔が真っ赤になってしまい、少年が見たかったのとは違うものになってしまったが、続けて言った。
「だからね、ひっこししても、きっとまたあえるの！あえるにきまってるよ！」
少女はその言葉を聞いて、少年の顔を見て、「ほんとう？またあえる？ぜったいにそうよね？」
「ぜったいあえるもん。おほしさまにねがいごとしたんだから！」

少女は少年と再会できると信じ合えるまでお互いに言い合った。
何十年に一度しか見れない流星群のお星さまなんだから、普通のお星さまとは違うと。
お星さまに願ったのだから大丈夫だ、と。

やっと安心したらしい少女は、少年が決意して言ったときの様に少年に言った。
「またあえたらね、そのときはわたしのねがいごとをかなえてほしいの」
「ねがいごとを、ぼくと？」

「うん。●●くんとじゃなきゃ、かなわないものなの！」
「わかった。やくそくする！」「ぜったいよ、ぜったいかなえてもらうんだからね！」

少年はその後引越し、少女の町を去って行った。

少女との約束を持って。

そして少年は高校1年生になった年に。

偶然にしてはおかしい、そんなことが起きることになる。

1、入学初日

４月7日の入学式の朝。入学目前の萬木(ゆるぎ)高校の寮にて。
この高校の寮は男女混合で、女子に対する対応は万全のものとなっており、男子が何か良からぬことをしようものなら、寮長にどこかへ連行されるらしい。寮に住む伊藤先輩の話では、言葉で表現できないとか。なんでそんなこと知ってるんですか、伊藤先輩！

ぼさぼさの頭を掻きながら、来栖孝介(くるすこうすけ)はベッドで惰眠を貪っていた。
「うーん、懐かしい夢だったなー」
昔住んでいた町にいた少女を思い出す。名前は思い出せないんだが、思い出だけが残ったような、曖昧な記憶しか残っていなかった。
夢というのは見終わった後次第に頭から薄れていくもので、眠気の方に意識がいってしまう。
朝はとにかく眠くてかなわない。眠気に勝つ方法はないものか。しかし、早く起きなければいけない理由があるのも確かだ。
この寮では朝飯が決められた時間で食べられ、その時間に間に合わなければアウト。
「・・・あ～、眠い」
目をこすりながら時計を確認し、もう起きなければならない時刻だとわかる。
孝介は着替えて寮食を食べに行き、学校に行く準備を始めた。

寮から高校まで歩いて5分ほど。
高校の校門をくぐると、校舎の玄関の方で生徒が集まっている。そこに新入生のクラス分けの表が張り出されているようだ。見たくてもここまで人が多いと見えたもんじゃない。
孝介は他の生徒たちが自分のクラスの場所を確認するのを待って

いると、きょろきょろと何かを探している様子の女子がいた。なんだろう・・この、話しかけて下さいみたいなオーラは。
その女子は背にまで届く長髪、前髪が長いせいで目が隠れてしまっている。背が小さく、頭がせわしなく動くため尻尾を振っている小動物のイメージが湧いてくる。

とりあえず、孝介は小動物のような女生徒に声をかけてみた。
「何か探してるのか？」
「・・・！！」
女生徒は驚いた表情をこちらに向けたまま固まってしまった。人見知りの激しい子？
「えっと、気にしないで。・・続けてください」
だめだ。話しかけてみたが、そんな反応をされたら悪いことしちゃったみたいな罪悪感を覚えた。

そう女生徒に告げてクラス表にもう一度目をやると、玄関に集まっていた生徒たちが減っており孝介にもクラス表が見えるようになっていた。
そしてまた女生徒に目をやるとあれ、いない。どこにいったんだろ。
まぁそれはそれとして、クラス表を見て自分のこれから通うこととなるクラスに向かうとしますか！

自分のクラスである１－Ｄの引き戸を開けると、
・・・ん？
なんか見覚えのある女生徒がクラスの窓側にいるのだが、気のせいか。
そう思っていた矢先、元気のよさそうな男子生徒がこちらを見、かけ寄ってきた。
「よう！飯倉正毅（いいくらまさき）だ。この1年間だけといわず、よろしく頼む！」
「あぁ、こちらこそ。来栖孝介だ、よろしく」

同じクラスの男子と友達にならなきゃなー、と思っていた孝介だったが、こんなにも早く話しかけられるとは思っていなかった。
「なんとも自己紹介の早いことで」
「先手必勝だよ。友達ってのは早ければ早いほど作りやすくなるもんだ」
「うーん・・一理あるかも」
そんなことを話しているうちに友達となったようだ。たいていの人はこうやって流されて友達になるのかな、と思ったりした。

「はぁ・・まったく。正毅、その先手必勝な自己紹介をするなと中学の時も注意したのを忘れたの？」
飯倉の後ろから、眼鏡をかけた肩にかかるくらいの髪の女子が頭を抱えながら飯倉の頭を叩く。
「んだよ、ただの自己紹介だよ。悪いか？」
「悪いか？じゃなくてね。急にやられたらびっくりするでしょーが！」
「ん？孝介はなんともないみたいだけど？」
「それはそれ。これはこれよ！」
俺はどうやら普通ではない部類に入れられたようで、ちょっと悲しい。
「孝介、紹介するわ。こいつは葵佳奈（あおいかな）。腐れ縁でさぁ。ことあるごとに突っかかってきやがる」
「女性に対して”こいつ”ってなによ、”こいつ”って！」
「悪かったよすまんすまん」
「なにその適当な謝り方は！あんた後で覚えときなさいよ！？あぁ来栖君、このバカをよろしくねー」
そういった後、葵さんは女子たちの中に混じっていった。
一方、飯倉は「くそー、あいつは俺をなんだと思ってるんだ」と言ってなんだか悔しそうだ。
「まぁまぁ飯倉。落ち着け」

「ん？あぁ。それと俺の名前は正毅って呼んでくれ。なんか苗字は慣れん」
「おう。分かった」
そんなこんなで、入学初日は忙しなく時が過ぎて行った。

「・・・・。」
孝介と正毅達とのやり取りを窓際で見ていた女生徒は、孝介が寮に帰る姿を見て、それを追うように教室を後にした。

1、入学初日（後書き）

自分の文章はまだ拙いので、どこが悪いかどこがダメか・・
ちょっとしたことでもいいので書いてくれると顔が（＾－＾）になります
感想は、ひどいこと言われると立ち直れないのでやめて～＞＜；；
これが初の作品なので、暖かい目でどうか一つ！

2、帰り道

自宅通いの正毅と別れた孝介は、自分の住んでいる寮に向かって歩いていた。
寮は校内にあるが、学校の窓からは見えないところにあるのですぐ着くというほどの近さではない。
学校から寮への並木道を歩きながら、明日のことや部活について考えていたりしていたが。
孝介は後ろから誰かがついてきている気がした。

寮に住んでいるのは自分だけじゃないんだし・・気のせいだよな。
・・・・・・。
しかし後ろから視線が刺さっている感じがする。気になるなー。くそっ、振り向きてぇ！
孝介はまっすぐ寮に帰る道のりでその欲求を抑えながら寮に着いた。

寮の中に入ったというのに、未だ後ろの人はついてきている。ど、どうなってるのでしょうか。
自分の部屋のドアの前に立って鍵を取り出していると、後ろで気配のしていた人が自分の隣の部屋で同じように鍵を取り出そうとしている。
え？お隣さんだったのか。しかしなぜこうも気になったのか・・不思議なこともあるもんだ。
孝介は鍵でドアを開け、部屋に入っていった。

「・・・。」
隣の部屋に住む人は、少し悲しそうな顔をしたが何か意を決したように自分の部屋に入った。

時は流れ深夜、孝介は入学式の日は緊張していたのか疲れがたまっていたらしく早めに眠りについていた。そして、早く寝たせいか起きたのは2時30分。いつものベッドでないせいもあるかもしれない。

「ん～。喉が渇いたな。」

孝介は飲み物を探しにリビングへ向かった。冷蔵庫からジュース缶を一本取り出す。寮に引っ越す際に母が持っていくようにと言われたものの一つだ。

ジュースを飲みながら外の景色を眺めようと窓を見ると、……！？

女子が自分のベランダにいるではないか。何やらこちらを見ていたようだが、ばれたのに気づき慌てていたものの観念したのかじっとしている。

まだ春だし寒くはないだろうが、自分のベランダにいるのはおかしい。ベランダはお隣の人と仕切り板で区切られており、こちらに来ることはできるが、なぜこっちにいるんだ？

とりあえず窓を開け、ベランダにいる女子に近づいてみる。あ、この人玄関にいたあのときの女子か。

「どうして俺のベランダにいるんだ？」

勇気を出して聞いてみる。女子は話しかけられて動揺し、固まってしまった。最初に会った時とあんまし変わらないな。

「君、もしかして・・自分に何か用なの？」

さすがにストーカーさんですか？とか聞くのは失礼だ。まぁ、ベランダにいる女子の方が失礼なわけですけど。

自分の質問に答えようと女子は顔を上げ、

「・・話たいこと・・・あるの」

「ん？話したいこと？」
はて、話したいことと言われましても、心当たりがまるで無い孝介は女子に話を促した。
「それで、話というのは？」
「うん・・あの・・私と」
「・・・・前に会ったこと、ありますか？」
え、うーん。会ったことあるかと言われても、父親の転勤が3回もあったため、転校を度々している孝介にはよく分からなかった。
「会ったことがあるとしたら？」
逆に会ったことがあるとして、自分に少女は何の用なんだろう。
そう尋ねると女子は、自分の目を見てしばらく黙っていた。
前髪に隠れていた女子の目は、中に引き込まれてしまうような綺麗な黒で、月夜に照らされて輝いて見えた。
見つめ合っていると、女子は言う言葉を決めたのか、一段声を大きくして孝介に言った。

「・・・わたし、記憶喪失なの！」

へ？記憶喪失？それなのになぜ自分に会ったことがあると言ったのか。
そう疑問に感じるのを分かっていたのか、女子は答えを言うように、
「私・・ある時を境に記憶・・無くなっちゃって。」
「人間関係に関して・・・全くと言っていいほど・・・・覚えてないの」
「友達だって・・言ってる人もたくさんいたけど・・・答えてあげられないの」
「でも、玄関近くであなたを見て・・・会ったことあるかな・・・って思ったの」

会ったことあるかなって・・。そんなことを言われてもと思うが、自分に何ができるのか。その友達の時と同じように、答えようがないじゃないか。
「そう言われても、自分にどうしろっていうんだ」
「・・・うん。」
女子は、しばしまた黙り込んでしまった。そこで、うつむいたまま女子は言った。
「嫌じゃなかったら・・その・・・なんであなたを知り合いだと思ったのか。調べさせてほしいの」
「調べるって。具体的には？」
「うん。・・・一緒にいてほしいの」

はぁ？　どうしてこうなった・・・。

「・・・邪魔にならないように・・するから、・・近くにいるだけで・・・いいの。ダメ？」
駄目じゃないんだが、そのぅ。なんて言ったらいいんでしょう。
孝介はその問いにどう答えていいものかしばし考える。おれ、彼女出来た時（出来る気配はまるで無いが）どうすればいいんだ？この子誰？とか聞かれたらどうしよう。
そんな現実味のない話はおいといて（現実味のないって思ってる時点で・・）、クラスメイトからどう思われるんだろう。

正毅は分かってくれるだろうか。
そうして考えあぐねた結果、当たって砕けろといった気持ちで、
「あぁ、近くに居たいんなら居ても結構。だけどベランダからじゃなく、ちゃんと正面から来ること。
分かったな？」
「うん。・・・ありがと」なんだかその女子はうれしそうだ。
「それで、名前は？俺は来栖孝介」「私は・・・野田真弓（のだまゆみ）っていう

の」
「おう。じゃあ野田。玄関から帰れよ」
「うん・・・でも・・こういうのも楽しいかも」
「玄関からじゃないなら入れないし、ベランダから来た場合近くに居るのは禁止するぞ」
「う、うそなのっ・・・ちょっとしたジョークなのっ」
ホントにジョークなんだか・・・。
「あ、・・・言い忘れてたけど、お隣さんなの。・・・よろしくっ」
親指立ててこっちに笑顔を向けないでくれませんか。なんだかため息をつきたくなる。

入学して最初の夜は、そうして終わりを告げた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4451ba/

星降る夜の願い

2012年1月14日19時48分発行